
『孫呉の龍』 ～ 紅き龍の御遣いと白き天の御遣い～

墮落論

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『孫呉の龍』 〵紅き龍の御遣いと白き天の御遣い〵

【Nコード】

N7996Y

【作者名】

墮落論

【あらすじ】

この作品はTINAMI様で私が書かせてもらっていた作品を手直した上で此方に書かせて頂くものです。

聖フランチェスカ学園に通う子義龍虎は文武両道の究極超人。龍虎は近頃頻繁に妙な夢を見る様になった……「なんで俺が三国時代の呉にいるんだ??」、「そんな妙な夢を見た或る日龍虎は同級生が出て来る夢を見る「おいおい一刀……お前の隣にいる金髪美人の華琳って子は誰なんだ?」

これは其処から始まる二人の天の御遣いのお話です。

なお、物語の序章は二人が外史に行ってから何年か経った後のお話からスタートしますのでご注意ください。

序章（前書き）

以前TINAMI様に書かせて頂いた小説を此方に引っ越しさせる事にいたしました。

若干修正を加えつつの話となりますが宜しければお楽しみください

序章

長江に日が沈みだす。河岸の樹に背をもたせ沈みゆく夕日をじつと眺めている男が一人。質素な身なりではあるが、決してみすばらしくは無く、寧ろ高潔な風格を漂わせている。

男の前方を一隻の投網を積んだ漁船がゆつくりと進んで行く。櫓を少年が取り舳先には父親であろう者が何やら指示を出している。と、櫓を漕いでいた少年が河岸の男に気付き親しそくに声をかける。

「龍虎様あゝ！！何されてるんですかあゝ！！」

「おう幼節！！今日は親爺殿と漁だったのかあ！！」

「うんっ！！ いっぱい獲れたんで後でお城にも持って行きますからあゝ楽しみにしてくださいねゝ！！」

「ああ、じゃあまた後でなあゝっ！！」

舳先では少年の父親がこちらに向かい恐縮してしきりに頭を下げつつ息子に盛んに注意をしているようだ。

「あらら、幼節に悪い事しちゃったなあ」

おそらく先程自分に親しく声をかけた事に対する注意であろうと思ひ彼は苦笑いを浮かべた。

「さてと、そろそろ俺も城に帰るかな。いくら半休だとはいえ、あまり留守にすると雪蓮や冥琳がまた不機嫌になるからなあ……」

踵を返すと我が城に向かい、というよりは愛する妻達や娘達の下に帰るために、やや小走りになる龍虎であつた。

世に言う『赤壁の戦い』の後に『魏』、『呉』、『蜀』による三国同盟が成立して以来10年が経ち、世情は不安定ながらも徐々に復興しつつある。

ここ建業も三国の内の一つ『呉』の首都として急激な人口の増加、それに伴う犯罪率の上昇、慢性的な物資不足等様々な問題はあつたが、国民達は概ね戦乱の末に掴んだ平和を享受しており、明日という未来を夢見て日々生活を営んでいるのである。夕暮れ時の城下の街の喧騒を聞きながら、そして民の明るい顔を見て、龍虎は自然と笑みが出ると同時に今日迄の日々を脳裏に思い浮かべるのであつた。

「最初はどのような事かとも思つただけどなあ……全く、あの時の一刀と来たら……」

思い出すのはこの地に初めて降り立つた日の事。

「あれから色々な事があつて、なんとか戦争も終わって、気が付けば女房子供持ちか……まあそれは一刀も同じだしなあ。」

今は洛陽にあつて政務に忙殺されているであろう親友を思い感慨に耽つていた時。

「龍虎あゝっ！！」

いきなり後ろから抱きつかれた龍虎はたたらを踏んで立ち止まる。

「うわっ……と、雪蓮か驚かすなよ危ないなあ」

「ぶう〜ぶう〜っ、何よ愛する愛する可愛い妻が愛情表現で抱きついてあげてるのにい、龍虎冷たあ〜いつ!!」

「いやいや、可愛い妻って自分で言っちゃ駄目だろう」

「ええ〜っ、だって本当の事じゃない。ほらほら可愛いでしょう。ワ・タ・シ……」

とか言いながら背中に抱きついたままで雪蓮は女性独特の柔らかいものを押しつける。

「いや、あの、当たってるんだけど……その何と言うか色々拙いものが……」

「ふふん、だってワザと当ててるんだもん。気持ち良いでしょう、ほお〜れ、ほお〜れ」

「馬、馬鹿、止めるって雪蓮！ 街中だぞ街中。ほら皆が呆れて見てるぞっ!! それにもう城の前だし」

「イイじゃん。皆に龍虎と私は相思相愛なんだって所を見てもらえば。それになんてったって私は龍虎の奥さんだからあ〜」

「何？ そのバカッフル理論は?? ってか、こんな所冥琳や蓮華にでも見付かったら、また二人揃って説教だぞお!!」

「へへ〜ん、別に怖くないもお〜ん。冥琳も蓮華も「ほお〜っ雪蓮それは聞き捨てならんなあっ」……」

「へっ！め、め、冥琳？？」

城門の柱に背をもたせた艶やかな黒髪の『美周郎』こと冥琳がそれはそれは良い笑顔で佇んでいらっしやる。

「さて、それでは旦那様に我が友よ、お二人で街中をその様に楽しそうに歩かれていた事についてのお話を、少しの時間で良いのでお聞かせ願えるだろうか？？」

「いや、め、冥琳さん、こ、これはですねえ「旦那様！！」ハイ
スイマセン アナタノ オオセノトオリニイタシマス・・・・・・」

「ちょ、ちよつと龍虎！！裏切者！！」「雪蓮！！」「ハイスミマセン・
・・・・イカドウブundes」

「宜しい。ではお二人供政務室にでも参りましょうか」

龍虎と雪蓮はまるで今から十三階段でも登るかの様な重い足取りで連行されていく。それから暫くして龍虎の政務室兼用の自室内では、真っ白な状態になった龍虎と政務机に突っ伏したままで動けない雪蓮がいたのであった。

「うう~~~~っ」

「雪蓮、うるさいっ！！」

「だって、だって。冥琳ってば、ちよつと酷いと思わない！！」

「だって何も無い。政務を投げ出して逃亡した雪蓮が悪い！！」

「ええ〜っ、龍虎迄そんな事言うのぉっ!!」

「あたりまえですっ!! 雪蓮が逃亡なんてしたから、今日は半休の筈の俺まで冥琳に説教くらったじゃんか」

「ぶう〜っ、夫婦は何事も分かち合わなくっちゃぁね。龍虎!!」

「うわっ開き直りやがりましたね、うちの奥様は……」

「だってだって逃亡したのだって半分は龍虎のせいよっ!」

「うわっ!! 今度は逆ギレ迄しやがりましたね」

先程の事情聴取に名を借りた、冥琳のお説教タイムに体力と精神力を、生きているギリギリのライン迄削られて青息吐息の状態であるにも関わらず、二人はこうして微笑ましい? 言い合いを続けている。ちなみに冥琳は本日は入浴の日だと言う事で周循（龍虎との間の一人娘）と一緒に風呂に入りについてここにはいない。

「ねえ、龍虎」

ふいに真面目な声音になった雪蓮が問いかける。

「何??」

「今日はどこ行ってたの?」

「いつもの河岸だけれど……どうかしたか?」

「はああ？ 龍虎！ アンタ最近どうしたのよ？？ この前の休みの日も孫紹（龍虎との間の一人娘）連れて、あの河岸ですつといたじゃない」

声を荒げる雪蓮だが、ふと考えたくもないような事が頭を過ぎる。

「もしかして、龍虎……元いた世界に帰りたいなんて……」

雪蓮の声が微かに震えている。

「違うよっ……！」

雪蓮の目を見つめながら力強く龍虎が応える。

「でも……でも……龍虎……」

雪蓮の不安そうな目に涙が溜まる。龍虎は席を立ち雪蓮の横までいって雪蓮を優しく抱き締める。

「雪蓮、よく聞いてくれ。確かに俺はもといた世界の事を完全に忘れた訳じゃない。でもね、あの日気付けばこの建業にいて、そこで雪蓮達と出会って、疲弊した『孫呉』を皆で復興した時から俺の居場所は、建業であり君達そのものなんだよ」

「じゃあ、なんで龍虎は……」

「なんて言つかさ、長江を眺めているとね色々考えちゃうんだよ」

「何を考えてるって言つの……」

「俺は雪蓮達や『孫呉』の人達、そしてこの大陸で生きている全ての人々が俺を受け入れてくれた事に対して恩返しが出来ているのか
なつてね……」

そう応える龍虎の目はいつもよりさらに優しく雪蓮を見つめる。

「龍虎……」

思わず雪蓮は龍虎を見つめ返し徐々に二人の唇が近づいていく。

「まあ、雰囲気が良いのは結構なんだがな……」

「「へっ！　め、め、冥琳？？」」あつ、なんかデジャヴ、と龍虎は思いつつも慌てて二人は離れるのであった。

「ん、二人ともどうしたのだ？　鳩が豆鉄砲喰らった様な顔をして？」

「ぶうゝつ、何で冥琳は、私と龍虎が良い雰囲気の時ばかり邪魔するのよぉ」

拗ねた様な表情で雪蓮が文句を言う。

「おやおや、邪魔だとは心外だな。私は政務を怠けて旦那様の所に入り浸る困った親友の為に、我が愛しい旦那様と共に過ごす時間も限られているのだぞ」

「うつ、そ、それは……」

「それに、先程声をかけたのは、風呂が空いたので冷めぬ内にお前

も早く孫紹様と共に入ってくれば良いと思ったので声をかけたただけなのだな」

「そ、それはありがたいけれど、空気読みなさいよ空気を、せつかく龍虎と口付けを……ゴニョゴニョ」

「はいはい、雪蓮も冥琳もそこまでっ！！ 雪蓮も紹と一緒に先に風呂入ってきなよ。俺は冥琳と話があるからさ」

「ええっっ！！ 何それえ！！ 可愛い奥様放っておいて冥琳と一緒にだなんて。それって浮気だよねえ」

「いやいや浮気って……何言ってやがりますかこの馬鹿嫁は。冥琳だって立派な俺の奥様でしょうが！！」

「ああっっ、今馬鹿嫁って言ったあ！！ 言うに事欠いて、私の事馬鹿嫁って！！」

「馬鹿嫁に馬鹿嫁って言う事になんの躊躇があるもんかい！！」

「ああっ、今度は二回も言った！！」

ギヤアギヤアとまるで子供の喧嘩の様な言い合いをしだす二人。

「はあっっっ……」

それを見ながら盛大な溜息をつきつつも冥琳は思う。

（雪蓮や私、それに他の皆ががこんなにも穏やかな気持ちでいられる事や、建業の民が笑顔でいられる事も全て、龍虎お前のおかげな

んだぞ。充分に恩返しはしてもらってるさ。だからこれからも頼りにさせてもらうぞ我が愛しの旦那様)

そう思った冥琳の顔には暖かい笑みが浮かんでいた。

序章（後書き）

『司馬懿仲達の憂鬱』と同じく楽しんで頂ければ幸いです。

冥琳（前書き）

サクッと時間が出来たので第二話を投稿

毎度毎度で恐縮ですが、これを読んで少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

冥琳

「さてと、龍虎成分も補充した事だし、紹と一緒に風呂に行つてこようかしら……どう龍虎、親子みずいらずで一緒に入るう？」

龍虎と雪蓮の痴話喧嘩も一段落した頃、体力の限界値に近付きつつある龍虎に、何故か先程より活き活きとした雪蓮が含み笑いで聞いてくる。

「うゝん、紹と一緒につてのは魅力的な提案だと思うけど、さっき言ったように冥琳と話があるからね。今回は遠慮しよう。ゆっくりと紹と一緒に入つておいでよ」

「ええゝ何それえ、親子一緒に時間よりも大事な事なおゝ」

不満そうな声を出す雪蓮

「はいはい我儘言わないでね雪蓮。それに俺はいつだって子供達と一緒に時間の方が、何よりも大切だって事は雪蓮だって知ってるだらう」

「ぶゝゝつ、まっ良いか。じゃあ紹と一緒に風呂入ってくるから、冥琳その間、うちの大事な旦那様宜しくねえ」

「うむ了解した。ゆっくり入ってこい。しかし雪蓮よ、うちの旦那様と言うが、龍虎は私の大切な旦那様でもあるのだが……」

溜息混じりに冥琳が、そう返すと

「ヤアダゝ冥琳、細かい事は言いつこ無しよ。それじゃあ二人ともまた後でねえ。紹く、紹く母様と一緒に風呂入りましょう」

そう言いながら雪蓮は部屋から出て行き廊下を明るい声で（大声張り上げながらも言うが…）走っていく。

「はあゝ台風は去ったか……しかし雪蓮は、やたら元気だなあ。さつき迄俺と一緒に冥琳のお小言喰らったばかりなのになあ……」

「おや？ 私は別に二人に説教をした憶えは無いのだがな」

「いやいや、ありや間違いなく説教ですから。冥琳の背後から、どす黒い何かが立ち昇ってましたから……俺何か冥琳の気に障る様な事したかなあ??」

龍虎は、ここ最近の自分の行動を思い出しつつ恐る恐る、冥琳に尋ねてみる。

「ほほう、では旦那様は私が今日一日政務室で、どれだけの仕事を一人でこなさなければならなかったか。御存知でない……」

地の底から響いてくるかの様な声音で冥琳が龍虎に応える。

「うつ！ そ、それは……（ヤバイ、ヤバイぞっ！！ 間違いなく俺、冥琳の地雷踏んだらしい……タスケテ ガクガクブルブル）」

「良いですか、昼頃までは旦那様と雪蓮と三人で急ぎの案件を片付けておりましたが、昼食以降に旦那様が半休になった途端、隙を見て雪蓮の奴が逃げ出しましてなあ」

「い、いや、それは、その……俺が悪い訳では……（逃げたのは雪蓮であって俺は正規の休みじゃないか……ってそんな言い訳聞きそうじゃねえよ、今の冥琳……マジ コワイヨ タスケテダレカ）」

「ええ、旦那様はそもそも半休ですので悪くはありませんなあ。しかしその逃げた輩のおかげで楽しい楽しい政務を一人で、良いですかヒ・ト・リで片付けたのですぞっ、おわかりですか!!」

「は、はいつ、全く持って申し訳ありません。（えっ、何で俺、反射的に誤ってんの??）」

「全く雪蓮の奴は目を離せばすぐにいなくなる癖が今だに……ブツブツ、それに私だって偶には……タツトラト……フタリダケデ……ゴニョゴニョ」

龍虎の自室の机を睨みながら独り言を言う冥琳の顔は何故か上気した様に赤い。

「あ、あのお冥琳さん??」

「とにかくっ!!」

「ひいつ!!」

「まあ分かって頂けたのであれば、今日の雪蓮の件は不問に処しましょう。」

「えっ、雪蓮の件って、悪いの俺なの？雪蓮の責任者って俺？ ちよっと、いや、かなり理不尽じゃないのそれって……「旦那様!!」ハイ……ホントニモウシワケゴザイマセン」

あつこれも何回目かのデジャヴ……など思いながら、それはそれは見事なくらいの下座を冥琳の前で展開する龍虎の魂の叫び声が建業の街の夜空に木霊したとかどうとか。

（理不尽だあああああっ！！）

「ところで旦那様。先程この私目にお話しがあるとの事でしたが、いったい何の御用でございましょうか」

絶対零度の雰囲気を纏いつつ冥琳が問いかける。

「冥琳、あのさあ、もうそろそろ機嫌直してくれないかなあ……」

対する龍虎は先程からほぼ涙目状態であつたりする。

「おや私の何処が機嫌が悪いと仰るのですか、我が愛しのダ・ン・ナ・サ・マ」

「いや、本当もう勘弁してください、何この重々しい空気は……マジで他人がこの場に入ってきたら、この氣に中てられて氣絶するぞ！！（よし、こうなつたら……）」

「別に私は機嫌なぞっ……コラッ龍虎、な、何を急に！！」

龍虎は席を立つて、素早く冥琳の後ろに回り込み、そして椅子に座ったままの冥琳を後ろから抱き締め、耳元に優しく囁く

「ごめんな。いつも冥琳ばかりに負担掛けちゃって……呉だけで無く、三国間の仕事もあって大変だったのに、俺や雪蓮の後始末や育

児までも……冥琳には本当に感謝しているよ」

「うつ……」

急に抱きしめられた事とを考えてもいなかった龍虎の甘い囁きに声が出ず、冥琳は俯いてしまう。

「それに俺と冥琳、二人だけの時間も中々取れないしで冥琳に気を抜いてもらう事も出来てないよね、俺、本当に悪いと思ってるよ」

龍虎は俯いた冥琳の肩越しに柔らかく抱き締めて言葉を紡ぐ。

「龍虎……」

不意に冥琳が顔を上げる。

「何だい？」

「本当に、本当に、そう思ってくれているのか」

若干潤んだような瞳で、冥琳は問い返す。

「あたりまえだろ、冥琳は俺の大事な女性ひとなんだ！！ その大事な女性が苦勞しているのに何も出来ない自分自身に嫌気がさすんだよ。なあ冥琳。俺は冥琳を支える事は出来ないのか」

それは、龍虎の心からの想い。

「フッフ…フッフ…」

冥琳が龍虎から目を逸らす様に下を向いて笑いだす。

「冥琳?? ちょっと、冥琳… うっ… ちゅくっ…」

龍虎が笑い声に驚いて冥琳の顔を覗き込もうとした時、不意打ちの様に冥琳から口付けをされた。お互いにとって天露よりも甘美である唇から離れた時、余韻を惜しむかのように銀の糸が引いた。

「フッフ… 嬉しいものだな、己が認めた男が成長して、いつの間にか己を越えていくという事は」

先程迄とは全く違う、とびっきりの笑顔を真っ直ぐに龍虎にむけて冥琳は話す。

「冥琳…」

ずっと見ていたい、大事に守りたい愛する女性の姿が、そこに在った。

「ずっと見ていた… いや、追いかけていたと言った方が正しいか、龍虎があの時、我々の目の前に現れてからずっと…」

龍虎に抱き絞められたまま冥琳は話し出す。

「あの頃は戦が終わって同盟は結ばれたが、雪蓮や我ら呉の上層部は焦燥感で一杯だった… それはそうだろう我々は戦に負けたのだから…」

「冥琳…」

「そんな我々の下に、菅輅の言通りに魏に降り立った『天の御遣い』と共に『紅き龍の御遣い』と呼ばれた龍虎がやって来たのだ」

「初めは曹操殿が、我々の監視の為に龍虎を派遣したのかとも疑ったよ」

「へえ、初めは俺って、そんな風に思われてたんだ、まあ訳あって俺はどうしても『孫呉』に仕官したかったからね。」

龍虎は、さも当然の事とでも言うようにあつけらかんと言いつつ放つ。

「雪蓮や小蓮様は龍虎の事を一目で気に入り、初めから家族の様に接していたが、私は『軍師』という性格上、今一步踏み込めないでいたよ」

「まあ、軍師という立場でなら、それもしようがない事なんじゃないかな。俺は全然気にならなかったし」

「そのようだったな、なんせ事在ることに龍虎は私に話しかけてきたからな」

「そりゃあこの国について聞くなら冥琳に聞いた方が一番確実だと思っただのもあるなあ、魯肅さんや諸葛瑾さんもいたけれどやっぱり冥琳に話を聞くのが筋だからね。それに冥琳みたいな美人と話せるのは嬉しかったからね」

「フフ……調子の良い奴だ。しかし、いつの間にか龍虎に話しかけられるのを心待ちにする自分に、少々戸惑ったりしたものだぞ」

「そいつはどうも。しかし、当時の話を今聞くとコッ恥ずかしいも

んだなあ」

指で頬を掻きつつ龍虎が応えると。

「だからお前が我々の前から消えて、また戻って来てくれて、私に求婚してくれた時には……嬉しくてこのまま死んでも良いとさえ思ったものさ」

本日一番の衝撃的告白?? が龍虎を襲う。

「龍虎の前でなら私は呉の都督の周公瑾では無く、一人の女性としていられる。そして龍虎も私を冥琳として死が二人を別つ迄……いや、死しても尚、私の事を愛してくれると確信したから……そうでしょう龍虎」

「うつ……冥琳……」

なんかもう龍虎の顔は赤いの通り越してたりもするのだが、冥琳は御構いなしに最終兵器になりそうなぐらいの言葉を伝える。

「だから愛しているぞ龍虎。誰よりもお前の事を愛している」

ポフッ!! と言う音が聞こえた様な気がした瞬間に龍虎の理性も一緒に遥か彼方に飛んで行った。

「冥琳っ!!」

「きゃっ!?!」

思わず龍虎は冥琳を椅子から抱き上げ（まあ所謂、お姫様抱っこ…

…つてヤツです）冥琳に口付けしようとした時に冥琳の人指し指でその口を止められる。

「この様な雰囲気で龍虎の口付けを止めるのは無粋な事であるのは充分承知なのだが……出来たら入口のアレ達をなんとかしてくれたら嬉しいのだが……」

龍虎は、すまなさそうに言う冥琳の声に一氣に興奮が冷め、嫌な予感と共に自分の後方にある入口に顔を向けた。

「……じい……っ！」「……」

そこには物凄く期待に満ちた目でこちらを凝視する雪蓮と他の龍虎の妻達の姿があった。

ゆつくりと、抱き上げていた冥琳を椅子に戻して、わざとらしく大きな溜息を付きつつ、入口で顔を覗かしている妻達を部屋に通すべく歩を進めながら、誰に言うでもない独り言が口に出る。

「こんな良い雰囲気の中でベタなオチなんか付けんでもエエんとちゃうの……」

何処か力なく呟く龍虎の声が淋しげであった。

冥琳（後書き）

はいどうも……墮落論です。

『孫呉の龍』第二話目の投稿でございます。

今回の主役は冥琳さんです。作者の無い知恵絞って考えたんですが、このぐらいしか書けませんでした……（T―T）

やっぱり恋愛模様って難しいですねえ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7996y/>

『孫呉の龍』 ～ 紅き龍の御遣いと白き天の御遣い～

2011年11月24日12時54分発行